慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : 浅川泰宏著『巡礼の文化人類学研究 : 四国遍路の接待文化』古今書院、2008年
Sub Title	
Author	原, 淳一郎(Hara, Junichiro)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2009
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.14 (2009.) ,p.123- 126
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20090000-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：浅川泰宏著

『巡礼の文化人類学研究―四国遍路の接待文化―』古今書院、2008年

原　淳一郎

著者と最初にお会いしたのが十数年前、三田の居酒屋で行われた宮家研究室の打ち上げであった。その頃まだ著者は藤沢に在籍されており、遠路宮家研究室に参加されていた。評者は当時宮家準先生の講義を聴講していた縁で参加させていただいた。私にとって文化人類学や民俗学に関して受講した授業は全くもってこれだけで、ほとんどが独学である。しかも評者の専門は日本近世史である。そのため著者の力作を正当に評価しえるかどうかは甚だ心許ない。だがことあるごとにお会いして巡礼や旅について熱く語り合ってきた者として、本書は本当に待望の書であり、その書評を引き受けさせていただいたことに大変な責任を感じている次第である。

最初に簡単に構成を紹介しておきたい。

序章　研究の目的と方法

第１節　研究の目的／第２節　研究の方法／第３節　研究の対象／第４節　本書の構成

第１章　巡礼研究の展開と課題

第１節　巡礼研究の展開と文化人類学的課題／第２節　四国遍路研究の展開と課題

第２章　四国遍路の歴史的変容

第１節　浮遊する聖性／第２節　遍路宿の民俗史・誌

第３章　巡礼空間の認識論的再考

第１節　巡礼空間モデルの認識論的再考に向けて／第２節　広域過去帳調査―企画と方法について／遍路道をはずれた遍路たち／四国遍路の歴史人類学的考察と「乞食圏」／接待論の再考と第３世代型巡礼空間モデル／附録―過去帳調査に関する２つの覚書

第４章　まなざしの構築学

第１節　『憲章簿』にみる土佐藩の遍路認識／第２節　遍路者認識のモダニティ

第５章　四国遍路のターミノロジー

第１節　巡られる人々の遍路認識に迫るために／第２節　巡られる人々の民俗誌／第３節　遍路を語り分ける／第４節　〈ヘンド〉の解釈学

第６章　響振する苦しみ

第１節　苦しみの巡礼世界をみつめなおす／第２節　ある女性遍路にみる〈救い〉の構築プロセ

ス

結論　四国遍路の日常的実践としての接待

以上が本書の構成である。本来各章ごとの要約を施すべきだが、紙数の制約もあるため、ここでは省略したい。

さて本書の最大の特徴を一言でいえば、著者が「接待の徹底的な問い直しであり、文化人類学的な再解釈である」と述べるとおり、遍路される側の研究であるという点である。この点において、評者とは全く立場を異にする。歴史学では日本にかぎらず、思想文化史的なアプローチが多い。それはもちろん旅をした人物が書き残したものが歴史史料となるからに他ならない。そしてその解釈においては象徴人類学や宗教学の理論が援用されてきた。その一方で、旅人を迎え入れる側の研究と言えば、もっぱら民俗学や地理学の範疇であった。しかし近年では観光地理学や観光人類学の成果を取り入れつつ、歴史学においても観光地の地域史、名所論などが盛んとなりつつある。分かりやすく言えば、旅人の移動によって地域はどのように社会変容するのかという視点と、名所はどうして名所になるのかという視点である。こうした動向と「接待文化」は議論の次元が違うようにも見える。しかし社会経済史的な視点を強く持ち込まれた著者の接待論に関しては、決して無縁のものではないように考える。今後どのように交わっていくのか楽しみにしたい。

ところで、著者の接待論は従来のものと少し違う。四国遍路研究では、四国遍路特有のものとされてきた「接待文化」の宗教的意味（大師信仰）がことさら強調されてきた。これは著者の述べるとおり、巡られる側の視点を著しく欠いたものであった。著者の指摘したことはきわめて重要である。信仰的なものは、そのはじまりは自発性によるものであっても、やがて義務的なものとなる。人間誰しも最初興味を持って参加した集団への参加がしだいに義務化されて面倒となるという経験を持っているだろう。著者はこのことを強調しているのだ。これは全ての「接待」が内面化された信仰に基づいていることなどありえないという民俗的な発想によるものであろう。歴史史料ではなかなかそこまで語ってくれない。これには著者が徳島県の出身であり、いわば巡られる側の人であることにも起因するだろう。柳田國男は同じ民族による追体験でしか真の歴史は獲得できないと、なかば超国家主義的な危険を孕む発想を述べたが、ある一面では真理を照らしていることを本書は示している。

また一つの特徴は、厳密なまでの研究手法の修練をおこなっている点である。本書全般にわたる一点一点の史料に対する丁寧な史料批判や分析手法の説明は、ややまわりくどい点も否めないが、その真摯な研究姿勢に頭が下がる思いである。こうした成果が第２章の伝承研究、第３章の過去帳分析、第４章の土佐藩の遍路政策分析などに反映されている。

さらに本書の秀逸な点は、乞食をうまく論理のなかに組み込んでいる点である。通常歴史学にお

ける旅研究では地方文書や道中日記と、名所案内記類などの出版物を基礎的な史料とする。ところが一方で、文芸作品などに乞食、博打打ちなど闇の部分が描かれていることが多い。あるいは民俗調査では、「あの温泉はライ病患者が多く集う場所であった」という話を聞くことが間々ある。そのため歴史と民俗の狭間で旅の実像を捉えきれていないのではないかという不安感が歴史学者のなかにはある。ところが、著者は「遍路道をはずれるのは何故か？」という素朴な問題意識から説きはじめ、これを交換論の俎上において見事に処理している。サーリンズの交換論を援用して①見返りを求めない接待、②弘法大師の功徳を求める作善としての接待、のほかに③いわば接待文化を逆手に取って乞食を生業とする人々が施しを強要する場合の接待という視点を組み入れたことは、まさに一歩前進といえるだろう。得てして歴史学の旅研究が「きれいすぎる」と言われるが、こうした闇の部分に光を当てるのは民俗学の独壇場である。この意味で、巡礼研究が宗教学や歴史学などの「きれいな」思想文化的研究の呪縛から解き放たれるのには十分過ぎるぐらいの価値を持っているだろう。この第３章のもとは『日本民俗学』掲載の論文であり、本書の核といえる部分である。

第４章はこの３章の視点をさらに発展させたものである。まず従来厳しいと認識されてきた土佐藩の対遍路政策を再考し、土佐藩のそれは積極的な保護政策ではないものの、粛々と正統な巡礼路を歩む遍路者に対しては一貫して入国を許可してきたことを確認している。その上で、１９世紀頃から巡礼路をはずれる「乞食」を異端として排除していく方向性が強く打ち出され、続いて近代化の中で路銀をもたない「乞食」を支える「接待」を野蛮なものとして厳しく批判していく社会的風潮がうまれたことを指摘し、この背景に無産者である彼らを近代国家が統制し、国民国家に組み込んでいくという意図があったと述べている。フーコーの狂気分析理論を取り入れたこの第４章もまた著者の弱者への「まなざし」が反映されたと思われる部分である。

最後に本書のもう一つの特徴は、「歴史人類学」「救い」「まなざし」「脱構築」「言説史」「正当と異端」といった、1970年代からの文化史の流れが大方掴めるようなキーワードが使用されていることである。また新しい文化史においては「実践」の歴史が一つの主流である。旅行史も然り。この旅行史においては、単純に旅行という実践の方法だけでなく、旅行者が訪問する土地の統治形態や、慣習・礼儀作法についても目を配ることが言われてる（Jas Elsner and Joan-Pau Rubies(eds.),Voyages and Visions:Towards a Cultural History of Travel）。またネルソン・グラバーンらのホスト・ゲスト論もあり、日本においても参詣者を迎える側の研究が進展し始めている。総合すると、歴史叙述の世界においても巡られる側の研究が目下注目されているのである。しかも本書は、かつての地理学的手法による「観光地の成立」「山岳宗教集落の分析」といったものだけでなく、民俗学的手法をふんだんに使い、さらにはフーコーの言説論なども取り入れて遍路の歴史的変遷を追うなど、野心的な試みをしている。こうした点は既存の手法に甘んじないものとして評価されるべき点である。

ただし疑問点も残る。本書で随所に使用されている目新しい用語だが、わざわざ本当に使用する

必要性があるのかどうか疑問に感ずる箇所も多かった。本来こうした用語は新しい分析手法や視角が提示される場合に登場するものである。そしてこれを受容する側は、当然のことながら研究手法なり用語なりに対して吟味を加え、その発想を自分の分析手法に取り入れることで研究を発展させていく。だが本書は所々で用語に振り回されている印象も否めない。とくにその傾向は第５章に顕著ではないだろうか。〈オヘンロサン〉と〈ヘンド〉の語り分けと統合についての分析は、もっと簡潔に説明できるのものではなかったか（理論哲学を精錬させていくことが目的であれば別だが）。しかもその結論において、日常の論理を脅かさない限り〈オヘンロサン〉でも〈ヘンド〉でも接待がおこなわれ、その背景にはやはり大師信仰があると述べているのは、本書の当初の目標と矛盾しているのではないだろうか。

なお全般にわたって誤植が多いことも若干気になった。

とはいえ本書が四国遍路研究の一つの到達点であることには議論の余地はない。文化論的転回の影響だろうか、様々な分野で旅や巡礼の研究が増えてきている。近年では守川知子氏の『シーア派聖地参詣の研究』が、日本近世史の道中日記研究ときわめて近似した研究方法をとっていることに驚いた。巡礼研究には、「参詣」と「（日本型）巡礼」をどのように捉えていくのか、というまことに厄介な難物が横たわっているが、今後ますます学際的な方向へ進むだろう。こうした状況下、一つの野心的な試みが上梓されたことの喜びをもって筆を終えたい。筆者の力量不足、人類学の理論への不的確な理解などもあって、適切な書評になっているかどうか。筆者のご寛恕を賜りたいとともに、読者の皆様のご判断に委ねる次第である。

［本体価格8,715円］

（はら　じゅんいちろう　米沢女子短期大学）